■小松茂美 「平家納経」に憧れ、書から絵巻物まで、膨大な緻密な基礎資料を集成、人文諸学を横断できる「古筆学」を樹立した。

こまつしげみ

治安維持法・1925= 山口県防府市で、山陽本線三田尻駅の駅務掛小松幾蔵の長男に生まれる(出生届けは岩国市)。子煩悩な両親のもと、子も鉄道員にしようとする父からは、習字を叩き込まれ、

満州事変・1931= 6歳： 五一五事件・1932= 7歳： 中野尋常小学校に入学、男勝りの美人教師に、習字を鍛えられ、後に名筆といわれる基礎がつくられる。 帝人疑獄事件1934= 9歳：

弟1人、妹2人が誕生も、父の転勤の都度転校し、引っ込み思案で、友達はできないものの、成績は良く、

日中戦争始・1937=12歳： 健保+総動員 1938=13歳： 飯室小学校を卒業。難関の県立二中は不合格だったため、私立崇徳中学校を受験すると、トップで合格。

日米開戦・1941=16歳： 父が山口県の柳井港駅長に異動し、県立柳井中学校に転校。国語担当教師による藤岡作太郎「国文学史 平安朝篇」を用いた名講義で、国文学に開眼。父のような鉄道員にだけはなりたくないと思うようになる。 1942=17歳： 卒業。進学を望んでいたが、父の命で、広島鉄道局柳井駅貨物掛に勤務。父が、映画は禁止だが歌舞伎なら良いというのでのめり込み、のち、六世中村歌右衛門を「人間形成のお手本」として敬愛する。

創価学会検挙1943=18歳： 広島鉄道管理部輸送課に転勤。足を使つての現場確認の重要さを知り、算盤計算はプロ級になる。

敗戦・1945=20歳： この間、父は西条駅長に昇進、家族の転居は続くも、一家は空襲は免れる。*徴兵検査で、肺結核ながら合格扱い、字がうまければ戦線にでなくて済むと、急遽、習字稽古した小川汀鶴から、平安朝の仮名を「古筆」といい、紀貫之の「高野切」が最高峰であると教えられる(以後、小川が死去するまで親交)。結局、兵役免除になるが、広島駅近くの庁舎内で、別の階にいた父とともに、被爆。命が危ぶまれるも、奇跡的に回復し、中国新聞の記事で厳島神社の秘宝「平家納経」の参観を知って、是非見たいと思うようになる。敗戦後、開市の古本屋で、池田亀鑑の「古典の批判的処置に関する研究」に触れて、研究に開眼。

新憲法公布・1946=21歳： 鉄道管理部に再出勤、進駐軍に日本文化に理解ある担当者がいて、厳島神社の宮司野坂元定に話してくれ、憧れの「平家納経」と対面。手探りで研究を始め、唯一人話を聴いてくれた広島高女卒の先輩がその師後藤藤陽一に会わせてくれ、公卿日記を読むことから始まる、貸してくれた基礎資料「史料大成」の解説に没頭。「千僧供養日記」のことを教えられると、写真の所有者から借りて解説に努め、以後、次々と一流を訪ねて、教えを受けるとともに励まされる。意を決して、池田亀鑑に手紙し、教えを受けるようになり、

三大事件・1949=24歳： 中国新聞に「平家の厳島千僧供養」を寄稿、初の掲載記事になった。国鉄が運輸省から分離されて、運輸省広島陸運局総務部に転勤になると、厳島に公然と通えるように、観光係を新設を提案して認められ、それまでの研究を集大成、150ページもの観光案内全てを自ら企画・編集。本業はおろそかになり、ついに、父から勘当される。表千家宗匠の勧めで、古筆の展示会を企画、大反響、新聞にも取り上げられる。

独立回復・1951=26歳： 豪華本のようなガイドブック「いつくしま」が発刊され、以後の著書のプロトタイプになる。中国新聞に大々的記事が掲載され、吉川英治から青梅の私邸に招かれ、ついに、東京の本省転勤まで勝ち取り、憧れの池田亀鑑を訪ねて、弟子入り。研究のためには、東京国立博物館(東博)就職が良いと聞いていたところ、

メデー事件・1952=27歳：

TV放送始・1953=28歳： 東博館長がたまたま広島藩主の末裔で、野坂宮司が推薦してくれ、国鉄からの出向という形で、学芸部美術課に採用も、実態は技術員に降格。東博の先輩で文化財保護委員会の飯島丸と運命的な出会いをし、早速、「平家納経特別展観」に遭遇するなど、仕事は魅力的。結婚。

自衛隊発足・1954=29歳： この間、長男美彦が誕生するも、研究に没頭。妻の高い批判力によっても鍛えられる。池田亀鑑が急逝。就職前年に鑑賞会で出会った二荒山神社所有の「後撰和歌集」の研究に専念、

美智子妃・1959=34歳： ようやく、東博の正規職員になる。

安保闘争・1960=35歳： 広島県出身で美術を愛好する実業家が資金を提供してくれ、当時の出版界の常識を超える豪華本、

タイタイ病始・1961=36歳： *大著「後撰和歌集校本と研究」を処女出版、写本の筆跡の科学的分析方法を開拓、筆者を藤原教長と特定して学界を驚かし、東洋大学から文学博士号、アカデミズムの鼻を明かし、美術課書室室長に昇進。

TV宇宙中継始1963=38歳： 東京教育大学講師就任を皮切りに、研究を手伝ってもらう学生たちが、「小松学校」生となって行く。

東京リビック 1964=39歳： 大阪女子大学講師。「わずか3年後に、「校本浜松中納言物語」を発刊して周囲を驚かせ、手紙〜人と書I」も出版、林屋辰三郎らとの共著「光悦」で毎日出版文化賞特別賞になるばかりか、

大学紛争始・1965=40歳： 並行して進めた「平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究」は、画期的な成果と超豪華本になって、

いざなぎ景気1966=41歳： 川端康成と井上靖の推薦で「日本ペンクラブ」会員なるなど、様々な分野の多くの人たちから支援を受け、「手紙〜人と書II」。刊行された増補「史料大成」全45巻を購入。*日本学士院賞に至る。天皇臨席の授賞式で、国鉄時代父の上司だった佐藤栄作首相に声をかけられ、父へのわだかまりも氷解。NHKテレビで「ある人生〜書の謎」放送。{講談社}の「秘宝」シリーズの担当者が、「平家納経」について、放り出した研究者の代わりにすぐ書いてほしいと訪れ、非礼さに呆れるも、自分の研究書を出版して貰うチャンスと引き受け、

美濃部都知事1967=42歳： 「長寛二年九月」と題して、「平家納経」についての初の論文をまとめ、本格的な研究を開始、

霞ヶ関閥争 1968=43歳： 「かな〜その成立と変遷〜」(岩波新書)。味方だった野間清六はすでに退官、最後の頼みの館長の浅野が急逝して、嫌がらせは一気に噴出、他所でも閲覧拒否など妨害、学会誌などで正当に評価されることは皆無、

大阪万博・1970=45歳： {講談社}からは、まず、のちの大著「古筆学大成」の準備になる「日本書流全史」を、

日中国交回復1972=47歳： 東博の特別展の都合で、急遽、美術課長に昇進。続いて「古筆」、

石油ショック1973=48歳： 「日本書道説林」「平等院鳳凰堂色紙の研究」を出版、森豊の書評に励まされ、以後、「古筆学」を吹聴。

角栄金脈辞任1974=49歳： 「彦火々出見尊絵巻の研究」。「古筆学」の方法を駆使して、「平家納経」の研究を集大成し、

田中角栄逮捕1976=51歳： 「御物桂万葉集」「日本名跡叢刊」。「手紙の歴史」(岩波新書)。*「伊都岐嶋千僧供養日記」の翻刻と詳細な考証を含む膨大な「平家納経の研究」刊行。成し遂げた思いから、原稿の最後に、「完」を入れる。

JALハイジャック・1977=52歳： 東北大学講師。「平家納経の世界」。両親を京都南座の顔見世興行に招待。{中央公論社}から「日本絵巻大成」(全二十七巻)の編者要請、著名な監修者を置くという社長方針を蹴って、配本開始されるや大ヒット、

成田衝突・1978=53歳： 東京芸術大学講師。交通事故に遭った父が、「茂美に感謝している」と言い残して死去。{講談社}から、著名な能書家の真筆だけを集めた「日本書蹟大鑑」全二十五巻を刊行。

革新大敗北・1979=54歳： 金沢大学講師。「国宝手鑑翰墨帖」。{朝日賞}を受賞。この間、{講談社}では、「古筆学大成」打ち切りの危機が何度かあったが、最終的に、病床にあった社長の野間が出版を明確に支持して解決、

. 1981=56歳： 「日本の書」。味をしめた{中央公論社}から「続日本絵巻大成」全二十巻。井上靖の「本覚坊遺文」執筆のため、千利休の手紙の真贋を確かめ、

中曽根内閣・1982=57歳： 「書のみかた〜型と美」「鳥丸光広」。筑波大学講師。その出版と、新潮日本文学大賞受賞に貢献、

デイトニラント 1983=58歳： 朝日新聞の{ひと}欄に取り上げられる。

. 1984=59歳： 「購入し損なつた紀貫之「土佐日記」の写本を鑑定し、恩師池田亀鑑が予見していた第一級の藤原為家の自筆の写本と断定、{毎日新聞}に「紀貫之自筆本「土佐日記」の再現」を寄稿、最終的に国宝に指定される。

ジャコブ機墜落1985=60歳： 自らも「利休の手紙」を刊行。

バブル始・1986=61歳： 課長で止まったまま、東博を定年で退官。多くの賛助会員と錚々たる役員を得て(古筆学研究所)を設立。

リクルート事件・1988=63歳： 金沢美術工芸大学講師。{旺文社}赤尾一夫と意気投合、(財)センチュリー文化財団理事になり、

昭和天皇没・1989=64歳： 「日本絵巻聚稿」。*大著「古筆学大成」全三十冊配本開始。

ドイ統一・1990=65歳： 早稲田大学講師。{センチュリーミュージアム館長}に就任して深く関与。

ソ連崩壊・1991=66歳： 「利休の死」(中公文庫)。

55年体制終・1993=68歳： 「続々日本絵巻大成」全八巻と編者を続けた。「古筆学大成」全三十冊の配本完了、定価は揃えて180万円ながら、初版300部は売切れ、それほどの基礎資料であり、新聞では「昭和の定家」の紹介も。

自社さ連立・1994=69歳： 夫の死後、解放されたように活発になった母が天寿を全う。

初M(サ)事件1995=70歳： 復刻版「いつくしま」。「平家納経の世界」(中公文庫)。{旺文社}赤尾一夫は「小松茂美著作集」全三十三巻の刊行を、赤字覚悟で引き受けてくれるが、{古筆学研究所}での自由な研究もままならなくなり、

金融破綻・1997=72歳： {旺文社}からの「足利尊氏文書の研究」が好評になるも、過労が嵩じて、心筋梗塞で倒れ、九死に一生。 9.11テロ・2001=76歳： 「小松茂美著作集」全三十三巻完結し、{古筆学研究所}も閉鎖。

小泉郵政選挙2005=80歳： 「図説平家納経」と「平家納経 平清盛とその成立」を刊行、まさにライフワークに終符を打って、 2006=81歳： 「天皇の書」(文春新書)刊行。なお、後白河法皇の研究に取り組んでいたが、 2010=85歳： 心不全のため、没した。

吉村克己「満身これ学究ー古筆学の創始者、小松茂美の闘い」、Wikipedia、